

塵埃に白けた八重櫻が、春に後れて若葉の中に咲殘るのを、いとせめて哀れと見たも一日二日を過ぎて、勇ましい五月幟さへ、今日は最う目に入らぬ。

五月初旬の土曜日の夕方、青嵐の吹く江戸川端で、少しは酒の氣も有る門野正作が、突然調子外れの聲を出して、其連に言つた。

『おい吉井君、君は何か一番可悲いと思ふ?』

『何だかなあ。』と吉井謹といふ三十恰好の、洋



小説安

協

(春汀畫)

柳川春葉

服を着た、中肉の元氣の好さうな男が、買ひての夏帽子を冠直す。

正作も三十を多くは越えぬ年齢で、丈の高い體

に縞の背廣、茶色の中折帽子といふ扮裝、色の蒼白い處へ目の縁が少し赤くなつて、それで其目が妙にドンヨリ曇つてゐる。

『何だかなあつて、可悲いものを知らないとは情無い。能く考へて見給へ、人間は何が一番可悲いか。』

『地震、雷、火事、親父といつたのは昔の事だが、待ち給へ……然うさ、猶且金札を取るに來る鬼が可悲いな。』

駒は紅鹿毛、華奢な馬車、幌を撤ねた一頭曳の先を走る饅頭笠の、紺の法被は大猪染の手綱襟、馬頭を斜に颶と流れ、傘の影は傘の簷を軽くなぶる、薰風一路、麥畑を左にし、いさゝ小川の野芹の汀を右にして、睦び語るところは何事を、馬頭を斜に颶と流れ、傘の陰を覗いて飛ぶ燕も明々地と、利喜子の手にせる双眼鏡に映るのであつた。

『先生、何が見えますか?』

答へもせず疑乎と目成ると、風を含んだ傘の傾いで、此方を指さす顔白い人はこは抑も、訪ふべき人の家を指すらめ、指さして吾が事を物語つて居るであらうと、利喜子遽かに眼鏡を擋いて、

『糸子さんにも君子さんにも虚言を教へて濟ないけれど、君塚さんの御夫婦が入来しつたら、亞母にも爾う言つて、主人は今朝ほど夙くから他出したとお謝絶り申して下さいよ。』

女夫うち連れて、昨夜の禮にと訪づれ來たのを、無下にことはつて、さて其の人の還す車の、彼方の森の陰に入る時、世に捨てられた思ひして、寂しさに立ち寄る風琴の前、鍵盤に觸るゝともなく指を載せれば、

流れの岸の一本は波ことく口づけしはたことく忘れ行く

御空の色のみづあさぎ

はたことく忘れ行く

と、グルヘルム、アレンの勿忘草の一曲、頽然と手をつけば、扇を裂く音に高く響いた、『白さ

「借金取……ふむ。」と正作はやゝ冷笑の氣味で、「那様不眞面目な事は可けない。」
 「調戯ぢやない。是は眞面目だよ。」と吉井は四邊を見廻しながら「何が可壓だつて此奴が一番だよ。僕は今迄隨分ゞボラであたんだが、家を持つてから非常に臆病に、小心に成つて了つた。處へ以前他人の爲に印を捺して置いたのが、御町喫に三口とも倒込んで來たのだから、何うも實に閉口したよ。現に過日行方の知れなく成つた——君も知つてゐるだらう、彼の大澤ね——彼の一件だつてとう——僕が荷を背負はされて了つたぢやないか。其や是やで、お耻しいが今は四苦八苦といふ躰裁だ。」
 「成程、其は随分迷惑だらう。然し僕は那様物質的の事を尋ねたんぢやない。もう少し程度の高い……」
 「解つた。又所謂形而上の問題かね。お株だ。君は此頃可厭に其事ばかり氣に爲るやうに成つたが、一體何うしたといふのだ。」
 「別に理由は無いけれど。」と正作は苦笑を爲て

と言つて、背後から鞭で引撲かれでも爲るやうに、彼は傍々した舉動を爲る。吉井は何を言はれても落着き拂つて、呑氣に紙巻菓を燃らしてゐたが、
 「其處だ！僕が今尋ねたのは、人間は生きてゐる事が一番可悲い。」
 吉井は返事も爲すに二三間歩いたが「然し、まあの物事は然う極端にも言はんものさ。成程我々の一寸前は闇だ。それで漸く手探りで進んで行

くと、其行どまりは畢竟ジワハと死んで了ふのが落なんたらう。と思へば隨分情無い譯だが、其は何も我々だけに限つた事ぢや無い。又今日現存してゐる人間が初めて遭遇する事でも無い。天地開闢以來幾億萬種百億萬といふ人が、ぞろく通つて行つた道筋なんだからね。朝には紅顔の美少年も、夕に白髪の老翁と成る位ない。人間の命は畢竟生れん先から極つてゐる。我々は今更其を調べて見たり、驚いたり、また特別に情無がるにも及ぶまいぢやないか。」
 及ばなくつたつて、實際なら仕方が無い。仕方が無くつたつて。と鶴鳴返しに言つて、何うも工夫もつかんぢやないか。僕は今何處へ何んな豫言者が出て來たつて、お釋迦様が現はれて飛んでも無い有難い説教を爲れたつて、ニユートンの引力説が打壊されたり、無線電信が發明されたりした程驚きは爲ないよ。」「だから何うしたんだ。」と正作は無意識に帽子

の上を叩いて見る。
 「だから驚きも恐も爲ないといふのさ。」「だから驚きも恐も爲ないといふのさ。」「真理は驚くべきものぢや無い。大なる不思議は畢竟大平凡になる。けれども其大平凡が一番恐ろしいぞ。君は我々が何の爲に生れたのか、何の爲に生きてゐるのか、又何の爲に死ぬのか、其理窟を知つてゐるかい。」
 「那様事は知らなくつたつて可い。誰だつて解らんのだもの。」と吉井は相變らず煙草を喫して足りりさ。昔から聖人君子とかいふ者が現はれて、普通人より高い智識と高い徳をもつて何者かと質問したから、其を説明した者が現れたのである。然し其には時代がある。」と正作は奮然として「昔は時代が何うして生きやうかと質問したから、其を説明した者が現れたのだらう。今日の人間は最も那様事は尋ねたがらね。今日の質問は何故に生きてゐるか

といふのだ。人の煩悶や疑念は總て此一事に歸着する、科學が進むにつれて、一切の者が宗教や哲學が進んで来るにつれて、皆此疑問で行はりに成るのだらう。』『無論さ。因でもつて今の言ふ通り、何物を持つて來ても到底解釋の出來んものなら、其まに爲て置くより仕方が有るまい。君は眞理は平凡と言つたが、如何にも然うだ、平凡のうちにしてゐる人間は、要するに平凡に過ぎれば可い。浦らん事に氣を揉んで、頭鉢巻を爲た處で追付かんからね。唯我々は面白可笑く世渡りを爲れば、其が一番人間の仕事に忠實なものさ。昔の人の教へてくれた道徳は千萬年経つて少しも變りつこは無い。悪い事をして良心に咎められなければ、僕等は大手を振つて歩いて行ける。基督が言つたちやないか、明日の事を思はづらふ勿れ、今日は今日だけの事を心配すれば可いつて!是即ち今主義、平凡主義、語を換へて言へば極めて自然主義だ。』『呑氣なものだなあ。』と正作は嘆息して『實は

『天命を樂む。是が一番の満足ではないか。』『然うでは無い。』と此方は躍起となつたが、又考込んで『まあ斯様事は止さう。君と議論したて、迪も駄目だ。僕は勝つたつて仕やうが無いものなあ。然し何うしても解らん。』『ちやあ解るまで考へて見たまへ。』と吉井は笑つて『時に話に夢中に成つて、君は大變遠くまで來て了つたぢやないか。次手に僕の家へ遊びに來たら何うだ。而うして更に酒でも飲直して大いに氣を晴らさう。』『酒でも!』と江然練返して正作は初めて四邊を見廻した。二人は今右切橋も何時か過ぎて、小石川の都といふ水道町の通へさしかゝつてゐた。二階家績で、干乾た鹽魚を賣る店だの、駄菓子に水飴を

並てある家のなかには、ケバ／＼しい舶來小間物屋が、我は顔に最新式の店飾を爲てると思ふと、其隣に兩替と彫つた分銅を釣して、庫造の薄暗い酒屋が軒を接してゐる。狭い町だから兩側が一目に見えて、此三三町の家々は古きもの、新しきもの、雑然として唯世の中の不調和を示してゐるのである。

日は大分西へ傾いで、初夏の美しい光を斜に目じる岡に投げてゐる。櫻若葉、梅若葉、若楓もある。と見ると其中から眞白な鳥一鷺だらう有らうし、常磐木も有らう。それが、薄く濃くむら／＼と彩つて、ムツクリと高い腹を包んでゐる。と見ると其の向うに、キラつかせながら、尾越の征矢と見るまで、眞直に南の方へ飛んで行く。

『今度は又可厭に沈黙して了つたね。』と吉井は相手の顔を覗込むやうにして『何うだい奮發して出かけないか。』

『君の家へ』と正作は少し躊躇つたが『否そ

れは廢さう。僕は此上酒を飲ませられたら迷惑

『那様事を言ひながら、君は結局附合つて呉れ

る意かい。』

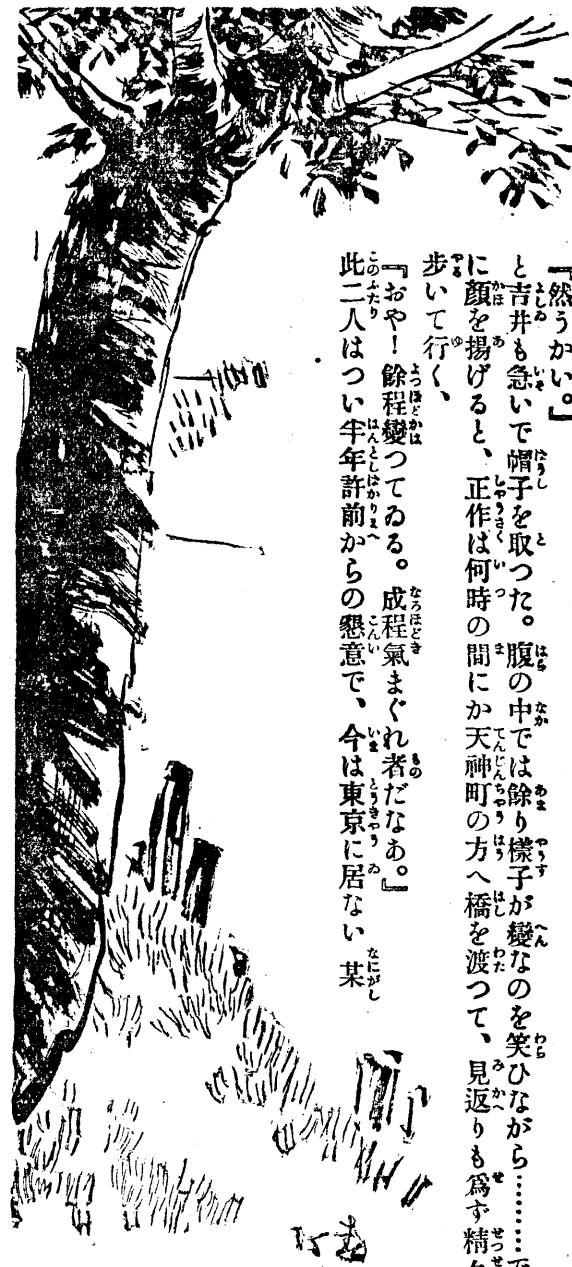
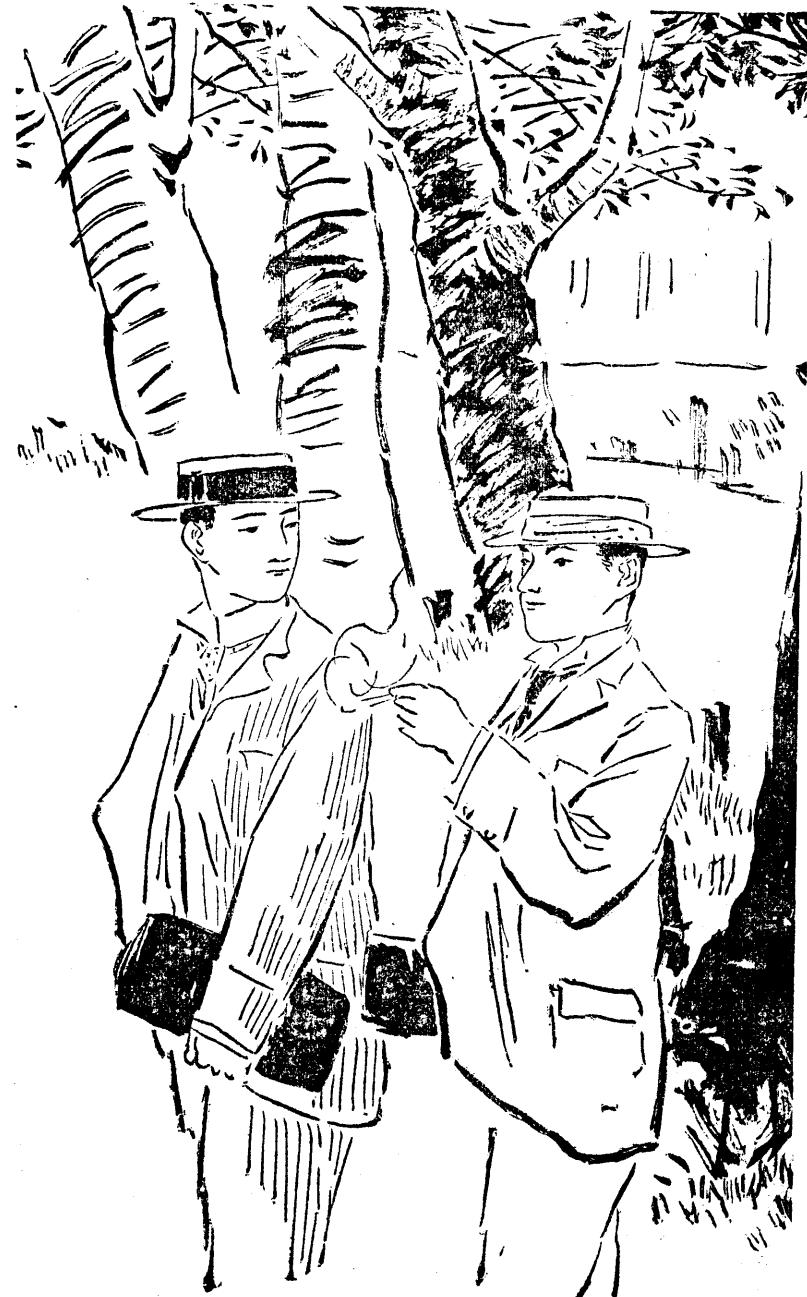
『まあ構つて呉れるな。僕は行く處まで行くの

のわかれ目まで連立つて來た。吉井は又氣に爲

て、

337

336



だ。』とキヨロ／＼して『ちやあ此處で別れやう。是れから早稻田でも散歩して、それからゆつくり家へ歸る。』
 「可笑しいねえ。其程悠々としてゐるなら、僕の家へ來たつて可さうなものぢやないか。君は今家で待つてゐると殊勝な事を言つたぢやないか、然う氣に成るなら早く歸つてやり給へ。』
 「處が其待つてゐられるのが實に閉口なんだ。』
 と横を向いて顔を覆めたが、忽ち周章狼狽いて『左に右失敬！』
 「然うかい。』
 と吉井も急いで帽子を取つた。腹の中では餘り様子が變なのを笑ひながら……で直に顔を揚げると、正作は何時の間にか天神町の方へ橋を渡つて、見返りも爲す精々と歩いて行く、
 『おや一餘程變つてゐる。成程氣まぐれ者だなあ。』
 此二人はつい半年許前からの懇意で、今は東京に居ない某

といふ男が、送別會の席上で紹介して行つたのである。

それが妙に仲善しに成つて、吉井は去る會社の役員、門野は某省の官吏、全然身分が違ふにもかゝはらず、お互に能く往つたり來たりしてゐる。

『眞實に可笑しい男さ。今度の日曜にでも尋ねてやらう。』

と吉井は腹の中で語つた。

『左に右煙のやうな事ばかり言つて、話相手には面白い。』

斯んな事を考へながら、彼は例の如く呑氣に洋杖を振廻し、陰氣臭い目白の坂をコツ／＼と登つて行つた。

正作は側目も觸らずに橋を越えて、關口の方へ曲らうとしたが、又偶と立止つて小首を捻ると、急にクルリと向直り、赤城下の方へ、大跨に歩出すのである。

『ちよつ！又初まつたのか。』眉を顰めて見たが、爲う事無しに玄關へ入り、自分で靴を下駄箱に始末して、むつツりと六畳の茶の間へ入る。此處は足も踏立てられぬ程、壊れた玩具の汽車やら、喇叭やら、種々なもののが散亂してゐる。其中に今年六歳に成る子供の静雄と、此春から同居した細君の姉の子で勝一といふ、是も同年

のが、櫛の曲つた洋刀を引張り合つて、僕のだくと争つてゐる。

『静雄！ 穏しく爲ないか。』

泣虫の静雄は父親の顔を見ると、俄に又一喚泣立てる。

『馬鹿、静に爲るんだ。』

『勝ちゃんが僕の物を取るんだもの……。』

『取るんなら取らして置け。』

『叔父さん。僕の物だよ。』と勝一は子供ながらも辯疏するのだ。

『何方の物でも可い。力の強い者が持つのだ。』

泣く奴は叔父さん大嫌だからな。静雄！ 貴様は一體弱虫の癖に可厭に負嫌で可かんぞ。』

『おや、貴様がいけないよ。』

と静雄は又泣く。其聲を聽つけたと見えて、臺所の方が忽ちドシバタすると、血相を變へて飛んで出たのは、細君の澄子であつた。

『えゝ煩いぢやないか。』

と矢庭に一つ我子の頭を撲つて、

『静にお爲といふのに解らないのかね。』

を示して見た。

『何が無理なんだらう。貴方から最初叱つて置いて、妾が出て来ると直に難題を有仰るのだよ。それも貴方は子供が可愛いばかりじやありますまい。え、家のは何うでも、勝一が大事なんでせうよ。』

『勝一でも誰でも、俺の目には一切平等だ。』

『うまく言つておゐでなさる。貴方は自分の子

より他の子が可愛いに違ひありません。』

那様事があるものかと、此方は忽ち眞赤に成つ

たが、一種の意地の悪い、自暴な、反抗心がむ

らくと起つて、『そりやあ、他の子が可愛い事を爲れば、他の

子も愛するさ。』

言ふや否や、澄子は夢中に飛かつて静雄の襟

髪を掴み、『そら御覽！お父様はお前よりか勝一の方が可

愛いのだとさ。お前は何うせ嫌はれただからね、

此家に居ないが可い。』と無闇に横面を張て『お

前は餘計者だよ。』

『何を爲るんだ馬鹿奴！』と正作は力任せに妻を突飛し、絶入るやうに泣しきる静雄を奪取つて『澄！貴様は何といふ沒分曉なんだ。』此光景に震懾て娘の勝一までが大聲で泣出す。少時は何が何だか言ふ事も解らなんだが、旋て一息吐くと、澄子が奮然として、『どうせ妾は没分曉です。はい、貴方のやうに、物事が能く解つてゐらしつて、人情のお有りなさるやうな方とは違ひますからね。』と息を切らし『眞實に因果たつちや有りやしない。お父様に憎まれる位なら、静雄、お前は電車にでも轢かれて死んだ方が増した。』

『那様事を言ふ……から、貴様は實に唐櫻木だと言ふんだ。』と正作も一生懸命に怒鳴つける。

『ですから、其は事新しく有仰らなくつたつて、自分で知つてゐますよ。』

『那様事を言ふ……から、貴様は實に唐櫻木だと言ふんだ。』と正作も一生懸命に怒鳴つける。

『ですから、其は事新しく有仰らなくつたつて、

かれて死んだ方が増した。』

『知つてたつて、猶且唐櫻木だぞ。俺の心が見えたんのか。』

『見え切つて情無い。』と澄子はおろく涙を流して『あ、妾はもう斯様事で生きてゐる

よ。』

『俺の子だから構ふ事は無い。貴様は今死ねば

可愛いと言つたぢやないか。然ういふ了簡なら、怪我位させたつて驚く事はあるまい。』

『ちやあ妾が死ねば可いと言つたら、貴方は殺しでもなさる意ですか。』

と澄子は静雄を抱締めて、チリくと良人に詰寄せる。

『でも、鬼の子よりもか増ですよ。』

と憎い程落着いた顔を見ると、正作は最う我慢

見ろ！宛然乞食の子だ。』

しでもなさる意ですか。』

と澄子は静雄を抱締めて、チリくと良人に詰

寄せる。

『でも、鬼の子よりもか増ですよ。』

と憎い程落着いた顔を見ると、正作は最う我慢

見ろ！宛然乞食の子だ。』

しでもなさる意ですか。』

と澄子は静雄を抱締めて、チリくと良人に詰

寄せる。

『でも、鬼の子よりもか増ですよ。』

と憎い程落着いた顔を見ると、正作は最う我慢

見ろ！宛然乞食の子だ。』

しでもなさる意ですか。』

と澄子は静雄を抱締めて、チリくと良人に詰

寄せる。

『でも、鬼の子よりもか増ですよ。』

と憎い程落着いた顔を見ると、正作は最う我慢

見ろ！宛然乞食の子だ。』

と澄子が思ふ様冷笑した。

「梅子は嘆驚して二人の可憐な顔を見較べつゝ、

『眞實に何時も御厄介ばかり懸けまして……澄

さんお前能く折檻してやつて下さいよ。』

『娘が飛んでも無い惡者に成りますからね。此

事に口出しは爲ない意!』

『どうして?』と梅子は突然な顔を爲る。

『娘が飛んでも無い惡者に成りますからね。此

方は自分の子だけで澤山。ええ、貴方の子の

お世話までは手が廻らない。』

『然うでも有らうけれど、……お前さん悪く取

つて呉れては困るわ。』

『おや、お前さんは、可笑しな事を。』

喇叭卒だよ。』

『あ、それから僕は何?』

『兵隊だから鐵砲を持つの!』

『あ、裏へ行かう。』

子供達は勝手に仲直りを爲て、血眼の親々を後に残し、さつさと裏口へ遊びに行くのだ。

『さあ其先を聞きませうよ。』と身軽に成ったの

で、梅子は佑と襟を搔合せ、其手で帶を引あげる。

『其が餘り身の程を知らない。增長し過るといふのですよ。』

『何時! 何時妻が……。』

『否那様立派な事を言つたつて駄目です、貴方は妻を差置いて、正作や老人達の氣に入らうとばかり爲てゐるんです。何程穩したつて……へえ妻には丁と其心が見透いて居ますよ。正作だけ然うだ。阿謾をつかはれば好い氣に成つて、此頃は姉様で無ければならないやうに思つてゐる。子供たつて然うです、解らないなりに少しは遠慮も有りさうなものだ、又無ければ

親が譯を言含めるのが當りまへなのに、それを爲ないから御覽なさい。近頃は家の靜雄より威張かへつて、妻の小言なんかは頭から受つけやしない。』

『子供の事なんぞ持出さなくつたつて宜うござります。』

『物の譬喩がさ!』と澄子は一際聲を大きくして『然うちやありませんか。子供までが其了簡

なもの、それと言ふのも姉様が悪いからです。』

『妾に何の咎が有ります。增長だの阿謾だと、お前は怪しからない事をつけく言ふけれど、妾には那様覺がない。』

『嘘ばつかり。其は第一正作が悪いのです、其は最うね……』と急に口惜しさうに口許を齧撻らして『同じ姉様でも貴方は容色好し、妻は斯

様お多福……それにしたつて餘りだ、眞實に腹が立つて……。』

梅子は喰驚して、口も利かずに眺めてあたが、あ、呆返つて物が言はれない、それでは……』

と言はうとして段々赤く成り『邪推も大概に爲てお置きなさいよ。』

『妾の言つた事が解りますか。解るのは自分に其だけの覺があるからでせう。へえ、何程妻は馬鹿だつてね。盲目や啞者ぢや有りませんからね。』

一方は此事を笠に被て腹散々に毒吐く、其が殘念だと言つて一方は泣いて辯解を爲る。抑も二

馬鹿だつてね。盲目や啞者ぢや有りませんから

『おいいく、お静に願ひたいね。僕は鋸の目

堪らなくなつて茶の間へ來て見ると、薄暗い中

で燈火も點けずに、二人の女は火花を散らして舌戦してゐる。

『おいいく、お静に願ひたいね。僕は鋸の目

立と、女の喧嘩を聞いてゐるが一番嫌だ。』

『だつて爲方が有りません、貴方が種を蒔いたのだから。』

と澄子は其方へ嗜ついた。種を蒔くといふ言葉には随分深諳な意味も有るらしく、當人は誇りがほに一警したが、正作は然うとは氣が着かぬ。

『まあ可いちやないか、起原は一寸と子供を叱つた事からだ。成程俺も少し虫の居所が悪かつたのだけれど……!』と梅子の方を見て『姉様満らん事で……夫婦の些細な衝突が貴方に飛火を爲たやうな譯なんです。何うぞ氣に障へずにはねえ。』

『否、然う有仰ると、妾實に何とも申上げや

うが無いのでござります。』と梅子は妹の顔をチラく見ながら『女にも似合ません、大きな聲

なぞを立てまして。』

『まあ／＼那様事はお互ツ子だから。何有人間は瘡に障つたらバツバと喧嘩を爲るが可い。喧嘩の内肛した奴は葛湯のかへり損なつたのと同じ事で實に始末がよろしく無い。なあ澄、お前も然うだ。』

澄子は『ウフン』と言つたばかり、何處を風が吹くかと空そぞろ。

『お前も一體少し氣が強すぎる。其時は時によれば俺だつて意識してゐて無理も言ふし、又氣の毒だと思ひつゝも、家の奴に當つて見るんだ。それを一から十まで眞に受けて、直に目の色を變へた日には、我々は毎日喧嘩を爲てるなければならん、状袋なら是だけ稼いで活計の足にも成らうが、喧嘩では腹が膨れんからねえ。』

梅子は義理に微笑んで見せたが、澄子は猶且ツとしてゐる。

『まあ左右世間に事なきれ、家の内も丸く治れば其に越した幸福は無い。斯ういふと又角が立つけれど、近所では家の事を能く言はんさうだ。』

『まあ左右世間に事なきれ、家の内も丸く治れば其に越した幸福は無い。斯ういふと又角が立つけれど、近所では家の事を能く言はんさうだ。』

斯ういふ時に何時も其材料を供給して呉れるものは、少しも僞氣の無い子供達である。靜雄と勝一は飯を食ふのと喧嘩を日課にしてゐるのだが、斯ういふことを中心として、今年七十九に成る正作の祖父で正義といふ老人、同じ古稀の齡を過ぎた其連合の母、それから澄子と梅子、是が代る／＼小競合をやらかす。つまり年寄夫婦、澄子の姉妹子供、此三組が相手撰まず入られての口論反目であるから、門野の一家は宛然鼎の湧くやうな有様だ。

正作も時によると、戦闘員に加はる事が無いでも無いが、彼は多く仲裁者に成つて、彼方の無理も、此方の道理も一人で呑込み、巧く其場を取り繕ふといふ役目を勤める。然うで無ければ實際果しがつかぬから、彼も餘儀無く斯う爲るの

で、自分で亦其が一家の主人たる義務だと諦めてゐるらしい。

子供の泣聲で目を覺し、八當を爲れながら朝服を着て、煙草を喫むのが漸うの思新聞一頁も碌に讀切らぬうち、何處から謠や愚痴を持込まれる、其を半分は空耳にしながら、慌てゝ洋服を着ると、又一時仲裁口を利いて、靴を穿く間も方々へ氣を配りつゝ、洋杖を抱込んで例の朽ちた門を出ると、彼は初めて人間に成つたやうな氣が爲て、發と一息吐くのが常である。今日は日曜なので、年寄夫婦の外は天下晴れて朝寝を爲たが、八時過に起きて見ると、枕頭は最も玩具だらけ大方一羅濟んだ後だらうが、馴れた耳には是も春の曙の鶯同様、却つて寝心をよくしてゐたのかも知れぬ。

珍らしく茶の間の方も静なので、靜雄にお母様はこうしたかと訊ねると、お醫者様へ行つたといふ。是は子供を置去に爲る慣用手段で、大方買物にでも行つたのだらうと、正作は直に感着いたが、同時に一人でも減れば、随つて今日は

子供は論外としても、全く家は賑過るよ。だから世間體も少しほは考へて、お互に我慢する事さ。』

『へい／＼。妾も最う何も申しますまいよ。』

澄子は返事も爲すに、トイと立つて櫻側へ出る。と、錐で揉むやうな嘆息をして、臺所の方へ去了つて了つた。

『然うですね。』と正作は驚いた様に立上り『此後は一寸と手持無沙汰に成つて、各自熟と考込んで了つたが、梅子は旋て顔を揚げて『おや全然闇く成りましたね。燈火も無しで。』

『分ぢや明日もお天氣らしい。』

と、つも無い事を言つて、それでも何程か気が樂さうに自分の居間へ歸つて行く。

三

其争ひがななく下火には成らず、朝に晩に必ず騒擾したが、二三日経つて漸く薄いで、家中

それだけ静たらうと、妙な事に安心した。
膳に向つた時、給仕を爲て與れる梅子に、
「澄はお医者様ですつてね？」

と言ふと、

「え、お医者様ですよ。」と梅子は笑顔を爲て『今日
は本所のお医者様まで行きましたのです。』

なかへ歸つて来ませ

んね。』

『それから日本橋
のお医者様へも一
寸手だから寄て、
山の宿のお寺へお
灸を据ゑて貰ひに
行くと言つて居ま
した。』

『そいつは又大分
念入だ。』と正作は
とうく失笑して
『其ちや定めし痛



い事だらう。』
比較的の寛ひで、場
校を使ひながら豫
側へ出ると、二坪
ばかりの庭にも初
夏の日が一杯射し
て、手造の植木棚
には、年寄が廿何
年育てたとかいふ
自慢の櫻を初めと
して、櫻にひねく
れた梅だの松だの
が、三段に行例し
てゐる。其下の土
間に朝貌の芽出が
十鉢ばかり、手洗の脇の日蔭を見る
と、風情も何も無い葉蘭が青黒い厚
葉ばつた葉を突出して、茎の中に掃
落して水引の赤いのが、却つて目に
ついて汚らしい。

奥の隠居で灰吹の音がするばかり、家の静さは宛然平常と世界が變つたかと思はれる。正作は初めて居ながらにして自分といふ者を認め、此處が自分の家だと感じて、一種言ふべからざる愉快を覺えたのである。

鉢へ炭をついでゐる。妹さん、今日は實に好い天氣ですね。』

彼は何を見ても嬉しくつて、常の居處へゆつくり坐込み、

『あゝ好い氣持だ。』

『今日は何方かへお出かけに成りますの?』と梅子はそつと鐵瓶を載せる。

『何う爲ませうか。』

少時無言で、正作は口當りの珍らしい刻煙草を燃らしてゐる。

『ですが、貴方も嘸御喧ましうございませう

ね。』

『何がです?』とポンと吸壳を吹出して、御町

噂に雁首で灰の中へ埋込む。

『何有、那様事は有りは爲ません、人間は二人居らんでも、老人といふ相手が有ります、老人が無ければ最後には僕といふ好敵手が有る。何時だつて同じ事ですよ。』

『妾共が參つて、御厄介が殖えましたばかりか、其爲に餘計御心配をお爲せ申すやうに成りましたのですから。』

『妾共が参つて、御厄介が殖えましたばかりか、其爲に餘計御心配をお爲せ申すやうに成りましたのですから。』

『然し彼の人は何うして彼様に氣難かしいのでございませう。稚いうちは然程でも無かつたのですけれど、妾は今度此方へ御厄介に成つて眞實に驚きました。』

『畢竟正直なんですか。喧嘩を爲るのは正直だ。』

『那様事はございませんわ。』

。

『否、僕はたしかに然う思ふ。其證據には子供を御覧なさい。鉛筆一本で攫合ふではありませんか、我々だつて實は鉛筆の爲に決闘も爲かねないのだが、悪い智恵が發達してゐるから、那様事に騒ぐのは損だと思つて、自分で自分を制して丁ふ。其代り種々理屈をつけて、名譽の爲

堪らなくなつて、鈍よりした眼が異様に光る。が、梅子は斯様煙のやうな事を聽かされたつて面白くも可笑しくも何とも無い。

『妾……種々言葉に盡せない程御世話を成つて置きながら、自分から斯う申しては餘り勝手が申さなければなりません事がござりますのです。』

『はゝあ。改まつて御相談とは?』

『妾……種々言葉に盡せない程御世話を成つて

『え? 突然妙な御話を聞くものだ。而して何處へおいでなさる。貴方はおいでになる處が無いぢやありませんか。』

『亡夫の故郷へでも参らうかと思つて居りますので。』

正作は目を丸くして『妙ですな、其は如何にも不自然だ。貴方が御故郷へ行つて困るのは疾かる知れ切つた事でせう。それが可厭だから斯う

徐々思ふ壺へ嵌つて來ると、何だか面白くつて

『然ういふ譯のものかも知れませんけれど、と梅子は忸怩した後『妾が參つてから餘計難しく成りましたやうで……』

『相手が殖えればね。何處だつて賑に成りますよ。僕は却て賑で可いと思つてゐますで、此頃渺々感じました。人生は鉛筆だね。』

徐々思ふ壺へ嵌つて來ると、何だか面白くつて

して不自由を我慢して僕の處に來ておられるの
だ。然るに……あ、其ぢや何か不満な事でも
あるのですね。』

「否、然うでは無いのでござります。』

『大方家中の口が煩いから、貴方は愛想を盡か
してお了ひなすつたのでせう？』

梅子は黙つて差俯く。

『無理は有りません。けれど致つた御主人の故
郷に行つたつて、其不愉快は絶えませんよ。何

處でも内輪へ入れば同じ事で、今迄より不見不

識の人が多いだけ、餘計貴方が氣が苦勞を爲な
ければなりますまい、だから此位の事は諦めて

辛抱しておゐでなさい。其うち又都合の好い事
が來るですとも。』と正作は身につまされて、心

細げに慰めて見る。

『はい、御親切の程は御禮の申やうもございま
せん。然し妾親子が居りますばかりに、それだけ

多く皆様に御苦勞を懸けますやうでは、實に氣
が済みませんのですから。』

『だから其は先刻言つたではありますか、居

ても居ないでも、何うせ喧嘩の種は盡きません。
すに了はうかと、頻に思案の體であつたが、と
うとう意を決して、

『正作さん！』

言ふ事だけ言つて了つて、茫然火鉢の中を見詰
めてゐた正作は、呼ばれたので黙つて顔を揚げ
た。

『再々申してお煩いでせうが、何うも妾が居
ません方がお家の爲に宣敷いかと存じますの
で。』

『まあ、那様遠慮は爲ないもので。』と言つ
たものゝ、正作は自分の取る月給の事から活計
向の事を考へて、熟々係累の多いのにうんざり
したが、『僕は貧乏してゐても未だ貴方の身より
は幸福ですからね。』

梅子は言はうとする事が疾に口の先まで出か
つてはゐるが、何うしても差向で其事を話す勇
氣が無い。況して何にも知らぬ人に、此上心配

させるのは忍びないと思ふから、例の濡衣を着

せられた口惜しさもとう／＼其まゝに嘲瀆して

了ふのである。

正作は無闇に煙草を喫んで『稀に静だと却て氣

が沈んで可かんものだ。喧嘩も仕事の一つです

ね。子供は居ませんか。』

と言ふ時、奥の隠居所で手が鳴る。梅子は直に

聽つけて、急ぎ其方へ行つたが、旋て引返して

来て、『御老人が一寸貴方に御用ださうですよ。』

と、此方は其用も聞かぬうちから先づ顔を感めた。

『直に來て呉れと有仰います。』

『何うせ碌な事では無からう。』

と捨白を言ひながら、正作は濶々立つて椽へ立

出で、窮屈さうに欠伸を爲て、それから考事

を爲ながら隠居所へ入つて行つた。

此男は稚い時に父母別れて、老人夫婦の手で育つたのだが、既に一端家を持つまで幸に

了ふのである。

老人は打揃つて達者である。

正義は此暑いのに、正作が着古しのフランチル
の襯衣を着て、加之つぎだらけの綿入り、大きな
眼鏡を鼻の頭へ載せて、熱心に蘭の手入を爲してゐると、海老のやうに屈まつた祖母が遠くの方に針仕事をやつてゐた。

『お早う！』

と正作は氣輕に拶挨拶をして、椽側の近くに尻を

落着け『朝から御精が出ますな。』

正義は眼鏡の上から其顔を眺めて『手が懸つて

面倒だが、是も暇潰しには持つて來いちやて。』

ハツハツハツとい聲で笑ふ。此方は飽くまでも

感心した面色で、

『僕なんぞは何ういふものか、少とも植木なん

ぞに趣味を持たんですよ。』

『若いうちは皆然うしたものさ。時に今日は日

も日曜も御存知無しちや。』

長話のはじまらぬ中と思つたか、祖母は此時煙

草盆を持って二人の間に割込んで、

『それに今日はお澄が何處へか行つたさうですね。』

『え、本所の友達の處へ行つて、其から何處とかへ寄つて、一番終に寺詣を爲て來ると申したさうです。僕は朝寝を爲てゐたから少しも知りませんでした。』

『そりや其筈ですわ、朝起の妻共でさへ知んのちやものな。』と祖母は膝頭を撫で廻しつゝ『身體の人は老人達を何と思ふてるのか、長屋住居を爲てゐるものだと、出入には隣へ挨拶位しますわな。其に一つ家に住んで居りながら、朝晩の事は元來他へ出るとも、一遍も断を言ふた例が無い。』

『然うですか、實に氣の着かん女だから。』と正作はまじぐする。

『氣が着かんと言つても十歳や十一の子ぢやあるまいし、來年あたりから學校へ上げる位の子供まで有る人ぢやないか。お前は女房の肩を持ちなさるか知らんが、氣が着かんとは言はせませんね。』

『彼の人は全く老人を馬鹿に爲た所業です。其は最う昨日や今日に初まつた事では有りません、疾から云はう／＼と思つたのちやが。』

此方は又疾から耳に胼胝の入る程聽かされてる楊枝を取つて吸殻を喫み、煙草盆の小抽出の爪楊枝を以て置きます。

『はい、全く澄が悪いに違ございません。』

『歸つて來たらお前から能く言ふて下さい、妻と、今迄虫を耐へて居たのですよ、けれどな、捨て、置けば際限が無いから、まあお前だけに能く言ふて置きます。』

『はい、全く澄が悪いに違ございません。』

『年幼も無い、那様事を言つて憎まれるよりは、氣毒ぢやが、静雄は何うも可愛氣が無いよ。』

斯う成ると有繫の正作も面白く無い色を浮べた

が、直に氣を變へて、
『惡戯盛ですからなあ。』

と半分は自分に辯護して聞かせた。然し一方は段々調子附いて來た處だから、斯んなはぐらかし位で引込むのでは無い。

『氣が着かんと言つても十歳や十一の子ぢやあるまいし、來年あたりから學校へ上げる位の子供まで有る人ぢやないか。お前は女房の肩を持ちなさるか知らんが、氣が着かんとは言はせませんね。』

『氣が着かんと言つても十歳や十一の子ぢやあるまいし、來年あたりから學校へ上げる位の子供まで有る人ぢやないか。お前は女房の肩を持ちなさるか知らんが、氣が着かんとは言はせませんね。』

『氣が着かんと言つても十歳や十一の子ぢやあるまいし、來年あたりから學校へ上げる位の子供まで有る人ぢやないか。お前は女房の肩を持ちなさるか知らんが、氣が着かんとは言はせませんね。』

『氣が着かんと言つても十歳や十一の子ぢやあるまいし、來年あたりから學校へ上げる位の子供まで有る人ぢやないか。お前は女房の肩を持ちなさるか知らんが、氣が着かんとは言はせませんね。』

『氣が着かんと言つても十歳や十一の子ぢやあるまいし、來年あたりから學校へ上げる位の子供まで有る人ぢやないか。お前は女房の肩を持ちなさるか知らんが、氣が着かんとは言はせませんね。』

『氣が着かんと言つても十歳や十一の子ぢやあるまいし、來年あたりから學校へ上げる位の子供まで有る人ぢやないか。お前は女房の肩を持ちなさるか知らんが、氣が着かんとは言はせませんね。』

『氣が着かんと言つても十歳や十一の子ぢやあるまいし、來年あたりから學校へ上げる位の子供まで有る人ぢやないか。お前は女房の肩を持ちなさるか知らんが、氣が着かんとは言はせませんね。』

『不人情ではないか、唯一人の子供をさ。其も可いが、置いて行かれた日には家に残つた者が飛んだ迷惑を爲ます。』

『不人情ではないか、唯一人の子供をさ。其も可いが、置いて行かれた日には家に残つた者が飛んだ迷惑を爲ます。』

『好い御志だ。其了簡なら家の佛へ對しても最も煽られれば其だけヤキモキして『では寺詣で』

『お前の親父や母の命日には、一向懸構ひ無しだやあないか、全體嫁いて來た以上は其家人であるべき筈だから、實家の事は先づ二の次にし

ても、門野の佛を。』

『最う少し盡して呉れても可さうなものです。』

『最う那様事は好い加減に爲なさい。』と突然正義が大聲で怒鳴つけ『黙つて聽いてゐればづべと煩うて爲やうが無い。』

『年こそ寄つたれ、名代の瘤瘍持で、隨分亂暴な事を爲かねない老人だから、正作は自分が叱付けられたやうに、ハツと青くなつた。』

『少しづつと要する事ですから、爲方無しに出かけたのです。』

『第一まあ、何の用が知らんが、朝ばらから出で行くかすとも可からうに。』

『ではお前の用事かえ。』

『然うですとも！』と此方は理を非に上げても庇つてやりたく成るのだ。

『それでも直に言ふたら、彼が又口答を爲て、

妻は腹が立つから、正作に言ふて貰ふ意です。貴方は又妻が物を言ふと、何んな善い事でも頭からお叱りなさる。と祖母は屹と其方を向く。怪しからんのは俺も知つてはゐるが、まあ老人は大概の事は大目に見て、若い者の氣任せに爲せるが可い。細々しい事にまで口を出すには及ばんわ。

「それが老人の義務ですよ。」
「否要らの世話といふものだ。第一正作を捉えて……」
『まあく、お祖父様、然う御立腹なすつては私が困るです。』と正作は頭を下げて『何うか此處のところは此儘になすつて。お祖母様の有仰る事も御無理は無い。ですからお澄には私から能く申聞けます。』
『何の妾の言ふのは餘計なお世話だから、打捨つてお置きなさい。お祖父様はお澄がお氣に入ださうです。』とガチ／＼灰吹を叩いて『馬鹿

だえ、他に親類が無くて氣の毒だとは言ふものゝ、子供まで春負て何時まで厄介に成る意だらう。何程妹の嫁いた先だとて、餘り人を馬鹿にして眺めてゐるのみ。正作は年中同じやうな事を爲る自分等の上を考へて、幾歳に成つても變らぬ夫婦喧嘩を茫然と

だえ、他に親類が無くて氣の毒だとは言ふものゝ、子供まで春負て何時まで厄介に成る意だらう。何程妹の嫁いた先だとて、餘り人を馬鹿にして眺めてゐるのみ。

『那様事は無いですが、當座困るから……今種々相談中ののですよ。』
『何しろ家内は多いし、家だけでもなか／＼苦しい處へもつて來て、又二人まで養つてやる。其は義理でもあらうが、他處では出來ない事だねえ。』
『其苦しい事を爲るのが義理だ。』と正義はガミ

（言ふ。
『貴方にお話を爲るのはありませんよ。』
正作は手帕で額の汗を拭き『其事も近い中に何とか法をつけますから、少時お待ちなすつて下さいまし。』と何か思出したやうに『一寸用が有りますから。』
匂々に隠居所を出ると、相手を失つた祖母は未だ口小言を並べ、正義老人は植木を弄りながら、又しても大きな聲で怒鳴りつける。其面倒を梳つて、正作は一日散に自分の居間へ駆込んだが、財布と煙草を袂に押込みつゝ、物に追はれるやうに周章と戸外へ飛出した。

四

高田老松町の吉井の家では、今もしも夫婦で博覽會へ行かうといふ矢先、玄関で案内を乞ふ聲が爲るから出で見ると、正作が例の通り顎々然として立つてゐる。

『やあ君か、能く來たね。』と吉井は元氣よく出

迎へる。正作は猶且考事を爲ながら奥へ通つて、チロ其處邊を見廻してゐたが、『君は何處へか出る處ぢやなかつたか。』
『あゝ、細君と博覽會へでも行かうと思つてゐたのだ、君も一緒に出懸けないか。』
『ぢやあ途中まで同行しやう。』
『可いちやないか、先方まで行つても！其とも君の家へ寄つて、細君や子供を誘引つても可いよ。』
『真平だ。外へまで耻晒しに行く事は無い。』
『こいつは大いにお差合が有るね。』と吉井は頭を搔く。

『え？』と此方は驚いて『然ういふ意味ぢや無い。僕のは違ふんだ。』
『どうでも可い。行くのか行かんのか。』

『此方に構つて呉れては困る。折角支度も爲たのだらうに、其を僕の爲に廢させるのは本意でない。だから途中まで行くとして……』

正作が熱心に引變へて、何うでも主義の吉井は一向呑氣なもの、

博覽會は七月まで有るから、強ち今日に限つた事も無いさ。』

然し僕だつて少くも五十返生きてゐる意だから、今日に限つて君を引留めるには及ばんと思ふ。

『變だねえ、可厭に七難しい事ばかり並べるぢやないか。其では斯うしやう、此處は一つ妥協して、二人でどこで散歩に行かう。然うすればお互に思ふ幾分かを實行して、まあ事も無く治まるといふものだ。』

正作は腕組を爲て『否、其妥協といふ事が悪いんだよ。』

『何故?』

『唯人間ぢや向上しないばかりさ。』と正作は勢よく言つた。

吉井は一笑して『君の底理屈にも實に感心する、意外な處で理屈をつけて見たがるから、然し君は細君や子供の前でも那様事を言ふのかい。』

今迄意氣盛であつた正作は、是を聞くと急に苦い顔を爲て、

『家内や子供? あゝ然うだ、家内や子供が僕に泣きたい程辛い思ひで言つたが、吉井は猶且軽く打笑つて、腹の中では『飛んだ變り者だ』と思つてゐる。』

〔白元〕



說小窮

死

(春帆畫)

國木田獨歩

九段坂の最寄にけちなめし屋がある。春の末の夕暮に一人の男が大儀さうに敷居をまたげた。既に三人の客がある。まだ洋燈を點けないので薄暗い土間に居並ぶ人影も朧である。

先客の三人も今來た一人も皆な土方か立んぼう位の極く下等な労働者である。餘程都合の可い日でないと白馬も碌々は飲めない仲間らしい。けれども先の三人は、多少か好結果かつたと見えて思ひくに飲つて居た。

『文公、そうだ君の名は文さんとか言つたね。身體は如何だね。』と角張つた顔の性質の良そうな四十を越した男が隅から聲をかけた。

『難有う、どうせ長くはあるまい』と今來た男は捨ばちに言つて、投げるやうに腰掛に身を下して、兩手で額を押へ、苦しい咳息をした。年頃は三十前後である。

『どう氣を落すものじやアない、しつかりなさい』と此店の亭主が言つた。それぎりで誰も何とも言はない。心のうちでは「長くあるまい」と云ふのに同意をして居るのである。

『六錢しか無い、これで何でも可いから……』と言ひさして、咳息で食はして貰ひたいといふ